

■(アーネスト・)フェノロサ　アメリカの東洋美術史家，哲学者。明治維新政府のお雇い外国人で，日本美術全てにおいての恩人。

ふえのろさ

ペリー来航・1853＝

マサチューセッツ州セイラムで，音楽家の子に生まれる。ミドルネームはフランシスコ。父はスペインのマラガ生まれで，兄とともに，フリゲート艦の船上ピアニストとして渡米し，教え子のイギリス系アメリカ人女性と結婚した。

桜田門外変・1860＝7歳：生麦事件・・1862＝9歳：明治維新・・1868＝15歳：廃藩置県・・1871＝18歳：明治6年政変1873＝20歳：

大久保暗殺・1878＝25歳：

琉球処分・・1879＝26歳：

・・・・・1880＝27歳：

明治14年政変1881＝28歳：

新体詩抄・・1882＝29歳：

岩倉具視没・1883＝30歳：

秩父事件・・1884＝31歳：

内閣発足・・1885＝32歳：

帝国大学始・1886＝33歳：

初の対等条約1888＝35歳：

帝国憲法発布1889＝36歳：

帝国議会始・1890＝37歳：

日清戦争始・1894＝41歳：

日清戦争終・1895＝42歳：

白馬会・・・1896＝43歳：

八幡製鉄始・1897＝44歳：

子規句歌革新1898＝45歳：

田中正造直訴1901＝48歳：

日露戦争始・1904＝51歳：

日露戦争終・1905＝52歳：

韓国反日暴動1907＝54歳：

アヲヲ創刊・1908＝55歳：

地元の高校を卒業後，名門校ハーバード大学で哲学を専攻，大学および大学院を優秀な成績で卒業し，卒業後は，新設されたボストン美術館付属の絵画学校に入って，油絵の技術や絵画理論を学び，美術への関心を抱く。アングロサクソンの支配するアメリカでは，スペイン系移民は就職が難しいうえ，高校時代から付き合い合っていた恋人との交際を彼女の両親から差し止められる状況に，アメリカ脱出を考え始めたところ，父が突然謎の投身自殺するという衝撃に，難問だった結婚資金の問題まで救ってくれたのが，前年来日し東京大学初代理学部教授になっていた，ハーバード大学の助手出身の生物学者エドワード・S・モースで，東京大学が政治学の教授を探しているを知って推薦してくれ，リジーと結婚して，来日，設立2年目の東京大学の文学部教授に就任し，哲学，政治学，理財学などを講じて，俊秀を育てていく一方，それまでの経緯から，来日早々の講演でキリスト教を痛烈に批判して，仏教界から歓迎され，日本美術に深い関心を寄せて，日本画の蒐集と研究を開始，まず，狩野派絵画に心酔して，

当時の狩野派の総帥に師事狩野永恵に師事，日本と中国の絵画の鑑定法を学び始め，“狩野永探理信”という画名を許されている。とくに一期生の，横浜の貿易商の子で抜群の英語力を持つ岡倉天心(寛三)と出会うと，自然と親睦を深め，通訳兼助手の役割を担うようになり，自らの右腕になって行くようになって，両者と，その後の日本美術史をも変貌させることになる。

長男カノウが誕生。*卒業して文部省に入省した天心を通訳に，奈良や京都の寺院寺などを巡り，廃仏毀釈で危機に瀕していた仏教美術を目の当たりにして，その素晴らしさに衝撃を受け，西洋美術に圧迫されて衰退する日本美術の状況を憂い，日本美術再興の必要性を唱え，美術研究家としての活動を始める。

ボストンの名医の家系に生れ，ハーバード大学医学部卒業後ヨーロッパ留学中，パリでジャポニスムに感化されて日本美術蒐集家に転向したウィリアム・S・ビグロウが，2度目のアメリカ帰国中のモースが度々おこなっていた日本紹介の講演を聞いて居ても立ってももられず，モースとともに来日して出会い，以後，離日まで行動を共にする。第1回内国絵画共進会で審査官を務めて，美術に公式に関わるようになり，狩野芳崖の作品に注目して親交を結ぶとともに，日本の伝統美術保存を目的に，政府の官僚を筆頭メンバーに結成した美術団体{龍池会}で「美術真説」という講演を行い，和訳出版された記録「美術真説」が爆発的な売れ行きとなり，はじめて“日本画(Japanese painting)”という語を用いて，“油絵(oil painting)”と比較して，日本画の優位な点を論じ，西洋文化に傾倒していた日本美術界に警鐘を鳴らし，日本の美術界や政府関係者を中心に大きな波紋を広げ，急激な欧化政策に対する揺り戻しの時期を迎える時流も受けて，日本美術再興の機運が一気に高まっていく。以後，日本の美術行政，文化財保護行政にも深く関って指導者的な立ち位置に至り，日本美術の研究を進め，広く世界に紹介して行く。

長女ブレンダが誕生。

刀剣商町田平吉を主に，天心らと新しい美術団体(鑑画会)を発足，当初は鑑定展示中心であったが，町田が身を引くと，自ら中心になって，西洋画の要素も取り入れた新時代の日本画家の養成と作品発表の場へと変化させ，芳崖，橋本雅邦らが出品，東京美術学校創立の母体となって行く。同じ年，文部省内では岡倉天心の働きかけで，図画調査会が設置されて(鑑画会)メンバーも委員として名を連ね，やがて自らも委員になるが，公立学校における日本式美術教育の採用，東京美術学校設立のための組織として，

図画調査会が図画取調掛に組織変更されると，東京大学を退職して，文部省に雇い替えとなり，宮内省の博物館美術事業も兼任する行政官となって，天心とともに東京美術学校の開校に向けての準備に奔走する一方，2年前に上野に開館した初代博物館長になるも解任され，この元老院議員になるも突然辞職した町田久成別邸で，ビグロウとともに，町田がかねて帰依していた滋賀県大津の(園城寺)三井寺法明院の阿闍梨桜井敬徳により受戒，キリスト教からの改宗は大きなニュースになっただけでなく，その後は，戒律を守り，敬徳との文通を欠かさず，学生らにも影響を与え，井上円了や清沢満之ら優れた仏教者を生むのである。文化財を重視する町田の影響で，天心，宮内省の九鬼隆一，内務省の丸岡莞爾，文部省の浜尾新らとともに，大規模な関西古社寺文化財調査を行い，法隆寺では，政府の身分証明書を示して，夢殿の厨子の開扉を要求，僧侶の激しい抵抗を押し切って実現，比類なき仏像「救世観音像」が世に知られることになったばかりでなく，調査の後，膨大な調査報告と文化財保護政策に対する提言を行い，“国宝(national treasures)”の概念も生み出して，今日の文化財保護行政へと繋がっていくことになる。

この年死去した芳崖の遺作であり代表作でもある「悲母親音像」は，フェノロサの指導で，唐代仏画のモチーフに近代様式を加味して制作したものである。

念願の東京美術学校開校が実現すると，幹事事務取扱に任命され，教育カリキュラムの作成や“画格”“美学及び美術史”などの科目を担当し，なお日本に止まろうとするも，あまりの高給だったため，*文部省との契約期間が終了するとともに，東京美術学校と帝国博物館を退職，勲三等瑞宝章が贈られて，帰国することになる。ボストン美術館に新設された日本美術部部の初代部長に就任し，自らが日本滞在中に蒐集した日本画はもちろん，モースやビグローのコレクションも寄託され，日本国外随一の收藏になった日本美術コレクションの整理と陳列を受け持ち，また全米各地で日本美術に関する講演を行って好評を得るも，西洋の物質文明と東洋の精神文化の融合するという理想には反響を得られず。

日本美術部の助手採用が認められて，日本にも縁のあったメアリーが採用されると，親しくなり，5年間のボストン美術館との契約を終えて退職するとともに，妻子を捨ててメアリーと再婚するや，ボストン社交界でスキャンダルとなつて，美術館ではフェノロサの名も消され，夫婦でニューヨークに転居，ビグロウまでもがリジーの味方をした離婚裁判で，前妻に巨額の賠償金を払わねばならなくなり，リジーがその後もフェノロサ夫人を名乗り続けるなか，夫婦で来日して，新たな収入源を探るも叶わず，在日中に妻が仮名で書いた小説が，アメリカでベストセラーとなり，自らも「The Masters of Ukiyo(2008年，日本語訳「浮世絵史概説」)」を出版，ついには，美術品売却までして凌いでいくことになってしまう。

在日時に参加した古社寺の宝物調査の成果は，この年の古社寺保存法(文化財保護法の前身)制定に至る。この年，天心が東京美術学校を排斥され辞職，連帯辞職した大観らを連れ，{龍池会}を引き継ぐ日本美術院を発足させる。再来日，最後の3度目の来日など，日本への永住を希望していたと言われるが，この間，メアリーは，広重についての本を本名で出版したほか，日本女性を主人公にした小説を出版し，のちに，映画化もされている。

この年，天心は，ビグローの紹介で，フェノロサの消されたボストン美術館中国・日本美術部に迎えられ，以後，ボストンと茨城県五浦のアトリエを往復するばかりになっている。

ロンドンの大英博物館で調査をしているとき，心臓発作で没した。英国国教会の手でハイゲート墓地に埋葬されたが，遺志により，火葬ののち分骨されて日本に送られ，上野寛永寺で，教え子で恩師の日本研究を支え続けた有賀長雄が祭主になって法要が行われた後，三井寺法明院に葬られた。18年後に死去したビグローの分骨も隣に葬られている。メアリーは夫の東洋研究に関する本をまとめたが，美術品などは経済的理由で売却した。

Wikipedia「アーネスト・フランシスコ・フェノロサ」，東京藝術大学ホームページ，山口静一「三井寺に眠る　フェノロサとビグロウの物語」，